

第2章 高島家住宅

福島県南相馬市小高区上町 1-87

一連の建物調査に先立ち、小高の写真に目を通したところ、屋上のある高島家のクラは今まで見たことのない独特な姿をしていた。その後現地を訪れ、たいへん手のこんだ左官仕事や和洋折衷の細部を知るにつれて、これこそが「小高スタイル」なのではと考えた。

昭和初期にこのような建築作品を建てようと思った初代と施工にあたった職人たちの意気込みに圧倒される。変形の敷地に寄り添う建物それぞれが語り合うように、小高のまちをまもってきた。

高島家の建築

印象深い姿の高島家のコンクリート蔵は、小高^{かみまち}の上町にある。江戸時代以来、浜街道を北の原町方面からあるいは小高の山手から訪れる人々にとって、市街地の中でも駅から離れた上町が小高の「まち」への入口だった。

高島家は街区の突端の角地にある。小高川を渡りまちに入ると、最初に見えてくるこのコンクリート蔵は、小高の要所をおさえる城のやぐらのようである。

相馬野馬追の二日目の行事を締める火の祭で打ち上げられる花火を見に、「ベランダ」と呼ぶ屋上に招待され、飲食でもてなされたことをこの土地の人々は懐かしむ。



通りに面して、貸し家（左端）・コンクリート蔵（左）・隠居（中央）が煉瓦塀とともに並んでいた。



コンクリート蔵を庭から見る

明治時代に小高へ移住した太田出身の初代高島慶治郎（明治 5 年 [1872]- 昭和 17 年 [1942]）は、現在地で鍛冶屋を始めた（現在主屋のある位置にあった）。親方を慕う弟子たちにより、報徳碑（大正 9 年 [1920] 銘）が建てられている（古写真①）。

慶治郎は 40 歳の時に鍛冶屋の店じまいをし、一時的に朝鮮に渡った後、小高に戻り隠居した。高島鍛工の浪江の店の番頭であった 2 代目勝好は呉服店を開店（地元の綿屋呉服店より仕入れ）、その後紙すき工場を経営したり（障子紙や唐傘用の紙を製造。職人を 10 人ほど雇い、楮を剥ぐ段階から手掛けた。）、農協に勧められて養豚を稼業としたこともあった。高島家は平成に入ってから、主屋（1972 年に建て替えた）に隣接するクリーニング店を営んだ。このように時代の流れに応じて、様々な商売を手掛けてきた。

コンクリート蔵

「クラ」と呼ばれる鉄筋コンクリート造の建物は、梁間 2.5 間、桁行 4 間の 2 階建、陸屋根を壁面上部から張り出し、洋風意匠の持ち送りで支える。外階段から登る屋上の周囲に施された装飾的なパラペットでは、開口を交互に菱形と長方形とし、各親柱上端に四角の笠木を設ける。

床下叩きはモルタル塗、自然石に束を立てて、1 階床組を支える。

外壁はモルタル塗刷毛引き仕上げ、軒下持ち送りの漆喰仕上げを黒と白で塗り分け、めりはりをつける。軒廻り、腰廻り水切り下方、南面窓周囲、隅部及び石造風の目地入り基礎はモルタル塗洗い出し仕上げとする。左官職人が、セメントと漆喰を自由自在にあやつり施した多様な仕上げが、外観を表情豊かにする。

1・2階とも南面に鉄扉鍍戸付きの開口部を開ける。1階西面には、外側に隣接する隠居から出入りする観音開きの鉄扉と内側に板戸を設け、かつては渡り廊下で繋がっていた。

北面の外階段は、庭側の東寄りに上がり口、2階床の高さにテラスを設け、屋上へと誘う。鉄管製手摺りの手摺り子間には、かつて唐草模様の装飾が取り付けいていたが、第二次世界大戦中に金属供出されて現存しない(古写真③に見られる)。屋上に入る踊り場のパラペットには、モルタル細工による紋章が取り付けく。

テラスは北面出入口の蔵前庇を兼ねる。戸前に石段、出入口周囲は左官による伝統的な鳥居構えとし、鉄扉で戸締まりする。この内側には板戸と格子戸の引き戸を設ける。板戸錠前金物は、宝尽くしの松竹梅さらには鶴亀と月、七宝で飾られる。テラス兼庇を支える洗い出し仕上げの角柱を笹縋りを付けた和風としながらも、下方には幾何学的な形態を取り入れ、2重の円盤と末広がり円柱を基礎とする。なお、庇の桁には鉄骨代わりに小断面の線路材が用いられている。

室内は、1階を倉庫とし、床は板張り、壁は軸部を見せる真壁、モルタル塗刷毛引き仕上げとす



テラスから屋上に張り出す階段と踊り場

る。開口部は、片引きのガラス窓。天井は半間ごとに架けられた2階床組の大引きを見せ、東側に2階に上がる階段を設ける。

2階は、和洋折衷の居室とし、2代目が新婚時に住んだことがあった。東端半間を板張りの廊下とし、居室境には引き戸(欠損)を建て込む。鴨居上には縋り型の施された長押が両面に取り付く。荒床周囲に畳寄せがあり、部屋は17.5畳相当である。また、階段上方に吊り押入を設ける。

壁は漆喰塗の大壁とし、天井周囲に漆喰塗コーニスを回し、中心飾りを設ける。窓周囲には左官による洋風の額縁を回し、木製の引き違いガラス戸を建て込む。この外側に金網と鉄格子を嵌める。



通りから見るコンクリート蔵

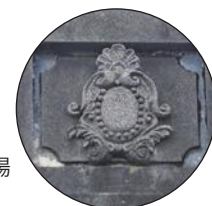
高島家コンクリート蔵

建築時期：昭和初期

設計者：不明 施工者：時田組

構造形式：鉄筋コンクリート造、2階建、屋上あり

規模：梁間 4.545m × 桁行 7.272 m



階段踊り場
壁の紋章



ベランダ廻りの左官仕事を補修、リリしくなった



空まで届きそうな
テラスの外階段



扉前の庇は屋上へのテラスを兼ねる

煉瓦門塀

煉瓦塀は、屋敷地の南側から鋭角に折れて東側へと続く。基礎部を地中では階段上に張り出し、煉瓦半枚厚の組積造長手積みで壁を造り、要所に柱を立てる。上方では隣り合う長手積みの間に小口幅の隙間を設けて積み上げ、視線と風を通す透かし塀とし、修復前の塀上端には重厚な笠木を設けていた。

門の位置では袖壁を設け、通りから控えて扉の取り付く煉瓦造の門柱を立てる。鉄管を溶接した現在の門扉は、近隣の板倉鉄工所が製作した。(鉄工所は初代の弟子が経営、現当主夫人母親が板倉家出身)

門柱を塀と繋ぐ袖壁は、煉瓦の質感が塀と異なり、塀の煉瓦積みとかみ合っていないイモ目地であることから、一連の仕事ではなかったことがわかる。門の写る古写真④によって、当初袖塀はなく、門柱が通り沿いの煉瓦塀と同じ線上に立っていたことが裏づけられた。門移動の理由は伝わっていないが、元の位置にでは現在門前に立つ五葉松の枝と緩衝するので、庭との関係で行われたことも考えられる。また、当時の門扉は木製で板が透かし張りで敷居も見える。



扉のまわりは和風、鉄扉は新しいかたち

コンクリート蔵とレンガ塀の建築年代

南面及び東面を赤煉瓦の塀で囲まれた土地の南側に、外観を洋風とするコンクリート蔵が立つ。慶治郎が朝鮮から帰国後、地元の建設会社時田組によって建てられたと伝わる。コンクリート蔵及び煉瓦門塀の建築年代を明らかにする史料は発見されていないものの、建物の写る古写真中の人物の年頃と聞き取りより判明したことから、両者とも昭和 10 年頃までには完成していたと考える。(古写真の項参照)

上と同時代に建てられたという隠居(2016 年解体)の新築は煉瓦塀があると工事の妨げになり、また煉瓦塀がコンクリート蔵の間際で納められていることから、煉瓦門塀は各建物が竣工した後に建てられたと考えるのが自然であろう。昭和 8 年生まれの前当主夫人の絹代氏が祖母と煉瓦塀の前で撮影された写真(古写真②)は 1930 年代初期の撮影と思われ、塀がこの時までには完成している。この数年後に、コンクリート蔵の前で絹代氏と弟勝明氏が慶治郎と共に端午の節句の幟の前で撮影されている(古写真③)。外壁表面には雨水の跡も見られ、竣工から時間が経っていることがわかる。

東日本大震災時の揺れで、煉瓦積みの笠木を乗せた煉瓦塀は上方が転倒し、塀のところどころに亀裂が入り、門柱は大きく傾いた。被災した塀を見ると、重たい笠木に振り回されて、透かし積みの弱い位置で折れて倒れたことがわかる。煉瓦塀には鉄筋のような補強は入っていなかった。小高区は原発事故に伴い避難指示区域に指定され、その後しばらく放置せざるを得ない状況にあった。

ようやく 2016 年秋に修復方針を決定し、一部形式を変更しながら、今後安全な姿で門塀を維持できるように修復した。当初は震災の足跡を残すために、一部破損したままの姿で残すことも検討したが、今後の敷地の活用を考え、安全な状態に門塀を復旧することに主眼を置くこととした。

煉瓦塀の修復と門柱の建て起こしを行ったことで、コンクリート蔵と共に小高で長年親しまれてきた景観がよみがえった。町並みの中でも際だつ外観を持つこの蔵は、建築時の時代性を色濃く反映する作品でありながらも、類似作品は建てられることはなかった。当時建設資金が不足し、土地を売るまでして完成した建物は、昔からの姿を保つ。赤煉瓦の門塀と鮮やかな対比をなすコンクリート蔵は、両者揃って特異な建築文化を象徴し、小高の景観をかたちづくる。



扉錠前にはおめでたさを山盛り、松竹梅そのうえ鶴亀も(上)

出入口前底柱の足元は円形(左)



軒を支える三角形の持ち送り



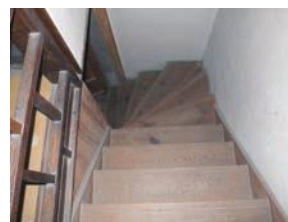
2 階室内は和洋折衷のしつらえ



天井には照明器具の取りつく洋風中心飾り



漆喰を引いた窓額縁



階段を見下ろす

和風の階段手摺りと
押入造作



2 階室内 西を見る



1 階室内



1 階での建物写真展示 / 思ひ出かふえ【和田】

コンクリート蔵の修復 2015 ～ 2016 年

- ・ 屋上床面の防水層が経年劣化していたので、防水工事を実施した。
- ・ 2 階室内壁の白漆喰塗仕上げが、過去の雨漏りによって部分的に剥落していたので、傷んだ範囲のみ下地から塗り直して、漆喰塗を施した。
- ・ 屋上軒下の漆喰塗が、屋上面からの漏水によって落下し始めていた。既存の仕上げをできる限り残しながら、補修した。併せて、パラペット外側の装飾的な漆喰塗を塗り直した。親柱内側のコンクリートが風化し、骨材があらわになっていた範囲を、モルタル塗で補修した。修復の際には、当初の施工状況がわかるように、状態のよい範囲は手をつけないように留意した。



東から見る全景



東隅では鋭角で曲がる



門袖塀に据えられた馬の像越しに見るコンクリート蔵



門と松の木



門袖塀と門柱



西から見る



庭の南東隅に残る報徳碑の
前身台座には丹頂鶴

高島慶治郎報徳碑

初代慶治郎の弟子たちによって、報徳碑が立てられたのは、大正9年のことであつた。庭の南東隅に立っていた報徳碑は、煉瓦塀修復の際に、庭からよく見える位置に移動し、新たな台座の上に立て直した。

もとの位置にある今までの台座には、丹頂鶴のつがいの像が立つ。



看板商品の方向転換ハンドル付き馬耕用の高島犁（すき）を並べた店先。

大正九年五月建設		高島家報徳碑 陰刻書き下し	
〔背面〕		〔正面〕	
高島 清		高島慶治郎先生報徳碑	
愛澤清作		松鶴書（落款）	
鈴木長寿			
富田庄八			
松井 一			
伊東八五郎			
板倉主税			
小田正意			
石川政義			
板倉勝意			
菅本儀助			
坪井□三			
高野 亨			
清水義春			
〔右側面〕		〔左側面〕	
鍛工師		岩井清川	
重定		剣	



初代慶治郎の弟子たちが顕彰碑を建てた。大正9年5月、慶治郎は、石碑の正面に座る。「高島鍛工一族 建碑記念」

①



高島慶治郎報徳碑 敷地南東隅の位置を庭中央に移動し、台座を新しくした

古写真から建築年代をさぐる

コンクリート蔵・隠居（取り壊し）・煉瓦塀からは建築年代を明確にする史料は発見されていないものの、古写真と聞き取りより、建築時期を検討する。

① 大正9年（1920）に報徳碑が立てられた時の写真に写る慶治郎は、鍛冶屋をたたんで朝鮮に渡ったと伝わる40歳ぐらいに見える。（「高島慶治郎報徳碑」の項の写真参照）

従って、帰国後の昭和初期に、コンクリート蔵・隠居、次いで煉瓦塀を建てたとすると合致する。コンクリート蔵の2階には2代目が、昭和初期に当たる新婚時に住んだと言うこととも矛盾しない。

② 昭和8年生まれの絹代氏が祖母と煉瓦塀の前で撮影された。少女の年頃（4～6歳ぐらい）からから、昭和12～14年の撮影と思われ、煉瓦塀がこの時までには完成していることがわかる。

③ コンクリート蔵の前で絹代氏と弟が初代慶治郎と共に端午の節句の幟の前で写る。昭14年生まれの弟勝明氏が2,3歳とすれば、昭16,17年の撮影となる。（絹代氏は8,9歳。）コンクリート蔵の表面には雨水の跡や二次世界大戦中に金属供出された手摺りの唐草装飾も見える。）



④ 門柱には当初袖塀はなく、通り沿いの煉瓦塀と同じ線上に立っていた。この位置では、現在門前に立つ五葉松の枝と緩衝するので、植生との関係で移動されたことも考えられる。門扉は木製で板が透かし張りにされ、敷居もあった。（撮影時期は不明。写真左下に、小高の遠藤写真館の押印。）

小高思ひ出かふえ

2016 年 10 月 15 日・16 日

小高あるき 歴史的建造物の調査報告を兼ねた「小高あるき」と題した見学会が平成 27 年 7 月・10 月に福島第一原子力発電所事故に伴う避難指示が出されていた小高区で開催された。この見学会において特に高島家住宅コンクリート蔵は「面白い」「これまで気づかなかった」などの多くの驚きの声が寄せられた。独特の外観、眺めの良い屋上テラス、漆喰壁の洋室などは、専門家だけでなく一般の方々にも魅力的に感じ取られていたようである。

小高の歩みたんがく会 この魅力をさらに活かすため、避難指示が解除されて約 3 月後の平成 28 年 10 月 15・16 日、小高区文化祭に合わせ、高島家住宅コンクリート蔵を活用するイベント「小高思ひ出かふえ」を開催した。イベントは南相馬市教育委員会のほか、市民活動団体である「おだかぷらっとほーむ」・「まなびあい南相馬」、



コンクリート蔵の細部の説明を受けながら、屋上まで登り、遠くまで広がる小高のまちを眺めた

小高区の復興をサポートする「小高復興デザインセンター」が共催し、改めて「小高の歩みたんがく会」という組織を設立した。なお、「たんがく会」の「たんがく」とは相馬地方の方言で、「持ち上げる」という意であり、「探る」「学ぶ」という意味をかけたものである。

思ひ出かふえ イベントを開催するにあたり、高島家の特徴を活かしたものを企画した。まずは、蔵 2 階の漆喰壁が白く美しいことから、これをスクリーンにした小高の古い写真の上映を



コンクリート蔵 2 階での写真上映会では、写し出される小高の風景や催しを懐かしむ声を口々にしながら、長い時間解説に耳を傾けた

行った。使用した写真は小高町史編さん事業で収集した写真を用いた。特に「写真集 おだかまちのすがた」（南相馬市 2006）に掲載した写真は昭和 40 年以前の古い写真が多く、「スライドのセピア色と白い壁がマッチしていた。」と好評を博した。用意した写真は約 350 枚あり、すべての写真を見るのに 1 時間以上要するが、来場者の多くが終わるまで席を立た

なかった。

また、上映に際しては担当者から写真解説と共に、コーヒー・お茶を提供し、ジャズの音楽を流して、心地よい雰囲気作りに努めた。アンケートには「写真の人や町の表情が豊かで生き生きしている」「昔を懐かしく思うと元気が湧いてきた」といった好意的な声を多く聞くことができた。

建物見学 蔵の1階にはこれまでの建造物調査成果のパネル展示とともに、専門家による蔵の解説を行い、建物の特徴と独自性を伝えた。コンクリート蔵の最大の魅力である屋上にも上がって見学いただいた。当日は良い秋晴れの日で、屋上からは青空と小高の町並みを綺麗に眺めることができた。

聞き書き コンクリート蔵に隣接していた建物が震災後解体されたことにより、蔵の前には大きな空間が生まれていた。この空間は、建物が無くなったことにより、逆に透かし煉瓦塀と蔵をゆったりと眺められる場所となった。ここにテントを張り、上映した古写真の一部を印刷しておき、小高の思い出を語る場を創った。ここでの聞き書きの内容は「まなびあい南相馬」が自分史作り事業として今後活用する予定である。



庭にテントを張り、古写真上映によって引き出された思い出を来場者より聞き取った

コンクリート蔵の意匠を王冠に見立てたペーパークラフトに、子供たちは夢中になって色を塗り、かぶって見せた



昔の小高のことをよく知る方々から、多くのはなしをうかがった

塀の透かし積みモデルを煉瓦で積んでみる



小高の文化財にまつわる缶バッチ。大悲山の大蛇伝説、相馬小高神社、浦尻貝塚、相馬絹業、高島家住宅などをモチーフに

小高グッズとクラフトワーク 歴史ある建物にちなんだイベントであるため、アンケートに回収の景品として小高区の歴史に係る缶バッチを作成した。また、子供向けのイベントとして高島家住宅コンクリート蔵と相馬絹業協同組合事務所を形取ったお面作りや高島家煉瓦塀を積立てるクラフトワークを行った。これらのグッズ作りには、主催者側がかなり盛り上がり作成した。このような市民協働のイベントは「効果」よりも「楽しみ」も重要な要素であるといえる。

建物の良さを活かし、ここでしかできないことを楽しく行う。小さなイベントであるが、建物の保存活用の一つのあり方を示すという当初の目的は果たすことはできたのではないかと思います。



煉瓦は目地材をはつり落として再利用



塀の煉瓦積みを完了



もと同じように透かし積みで復旧。一段段数を低くした



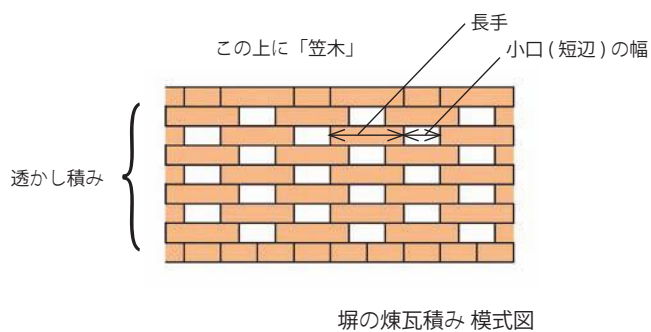
笠木をモルタルで施工中



煉瓦積み上端に鉄筋補強を導入



修復された袖塀



■ 煉瓦メモ

煉瓦の大きさにばらつきはあるものの、おおかた長手 7.5 寸×小口 3.6 寸×高さ 2.0 寸 (227 ミリ× 109 ミリ× 61 ミリ) で、東京形と呼ばれた寸法に近かった。大正 14 年 (1925) に JES 規格、次いで昭和 4 年 (1929) に JIS 規格で煉瓦の寸法の統一が図られるまでは一般的な仕様であった。

■ 修復の概要（工事期間 2016 年 10 月）

今回の修復に際しては、倒壊した塀の煉瓦を回収の上、モルタルをはつり落として再利用した。傾いた門柱を据え直した。塀については、将来同じように壊れることがないように、以下の工夫をした。

- ・場所によっては透かし積みの段数を少なくした（7 段から 5 段へ）
- ・笠木は小振りに変更し軽量化した
- ・煉瓦積み上端に鉄筋を入れて補強し、モルタルで笠木をかたちづかった
- ・今までの高さの袖塀と低くなった煉瓦塀間の段差をモルタル塗で抑えた
片側には表札を新設
- ・柱頂上をモルタル塗で山形にした

修復前の状況



修復前 東日本大震災時に塀上部が落下した



修復前 門柱は大きく傾いていた（高さ 1 m に対し 40 ミリ、北方向）。鉄扉は板倉鉄工所製作



修復前 袖塀への取付部に亀裂が入っていた



透かし積み 7 段と笠木からなる。隣地から見る（後設のコンクリートブロック造の「小屋」はその後撤去）



庭側から見る隠居 画面右のコンクリート蔵とはかつて渡り廊下で繋がっていた。
底部を増築、向かって右から台所・玄関・風呂場。中庭には日本庭園が造られていた



深い軒をセガイで持ち出す



西面建具



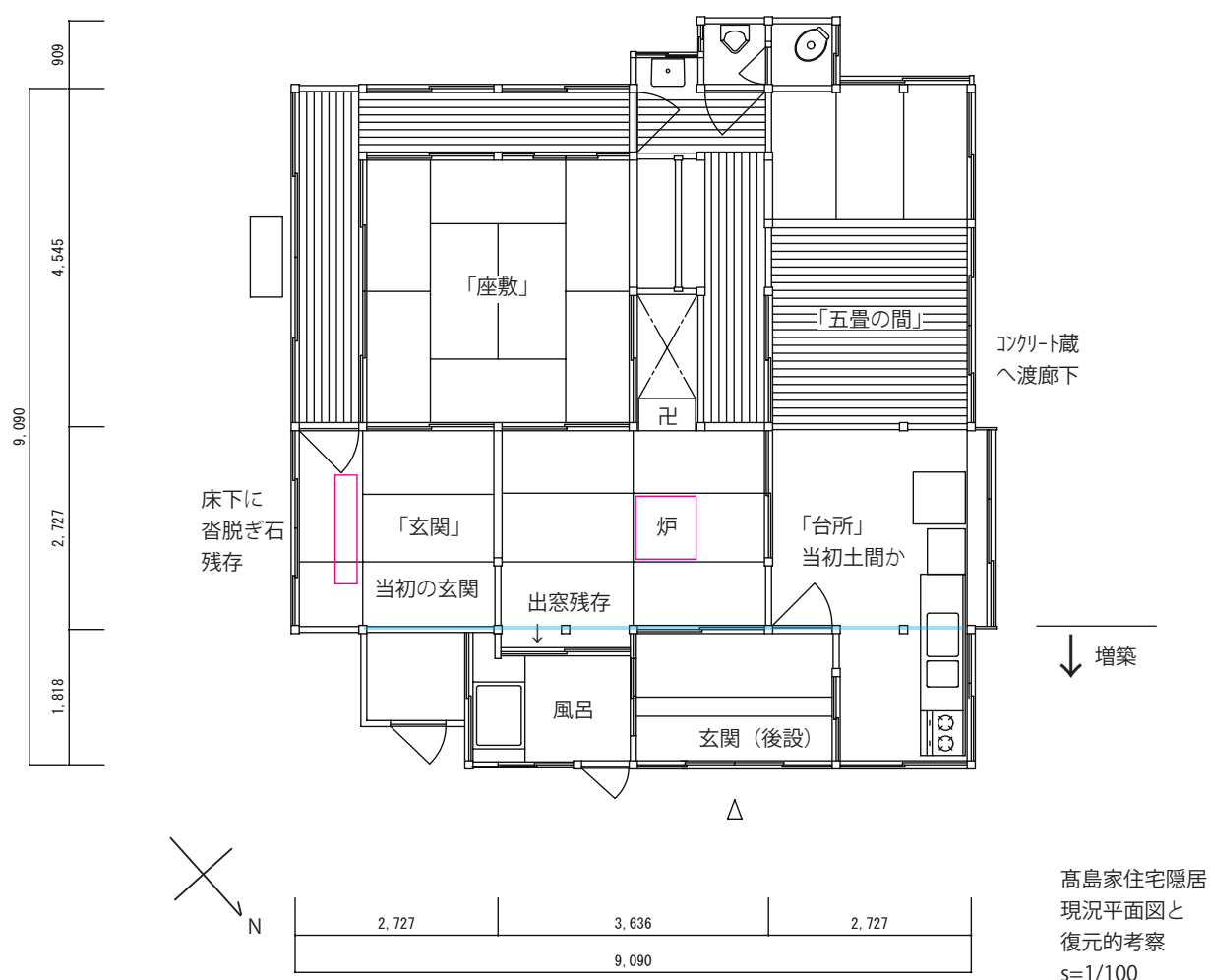
南面鑄鉄持ち送り



玄関をあがったところの部屋。正面に仏壇。画面左奥に座敷



和風の伝統的な小屋組 棟札はみつからなかった



隠居

遠くからも見えるのは、赤い釉薬瓦の葺かれた入母屋造の屋根である。初代高島慶治郎の隠居は、コンクリート蔵と同時期に建てられたと伝わる。軒廻りにはセガイを用いて、深い軒を迫り出している。

東側の縁からも上がれる「座敷」は8畳間で、北壁に床と押入、西面に1間幅の平書院を設ける。この南側には仏壇を置く6畳間があり、床には炉が切ってある。この西側の4畳半の床下に沓脱ぎ石が残り、当初玄関であったことがわかる。また、中廊下を挟んで西側の部屋からは、コンクリート蔵へと続く渡廊下が架かっていた痕跡がある。

屋根の構造は伝統的な和風の小屋組で、2011年の震災時にも瓦が落ちたりずれたりすることがなく、雨漏りの跡もなかった。しかしながら、壁面のたいへん少ない建物であったために、地震の揺れを受けて座敷周囲の柱が数本長押位置で折れ、屋根の重みで傾きが生じた。建物は全体として、高さ方向1mに対して150ミリ程度、南西に大きく傾いていた。

庭側に玄関・台所・風呂が増築されている。玄関北側の通りが当初の側廻りであったことが、南壁に残る出窓からわかる。

建物は、2016年1月に取り壊された。



貸し家 通りに面する南面



貸し家 土間一居室境の障子建具のガラス
中国風の景色が摺ガラスで描かれる



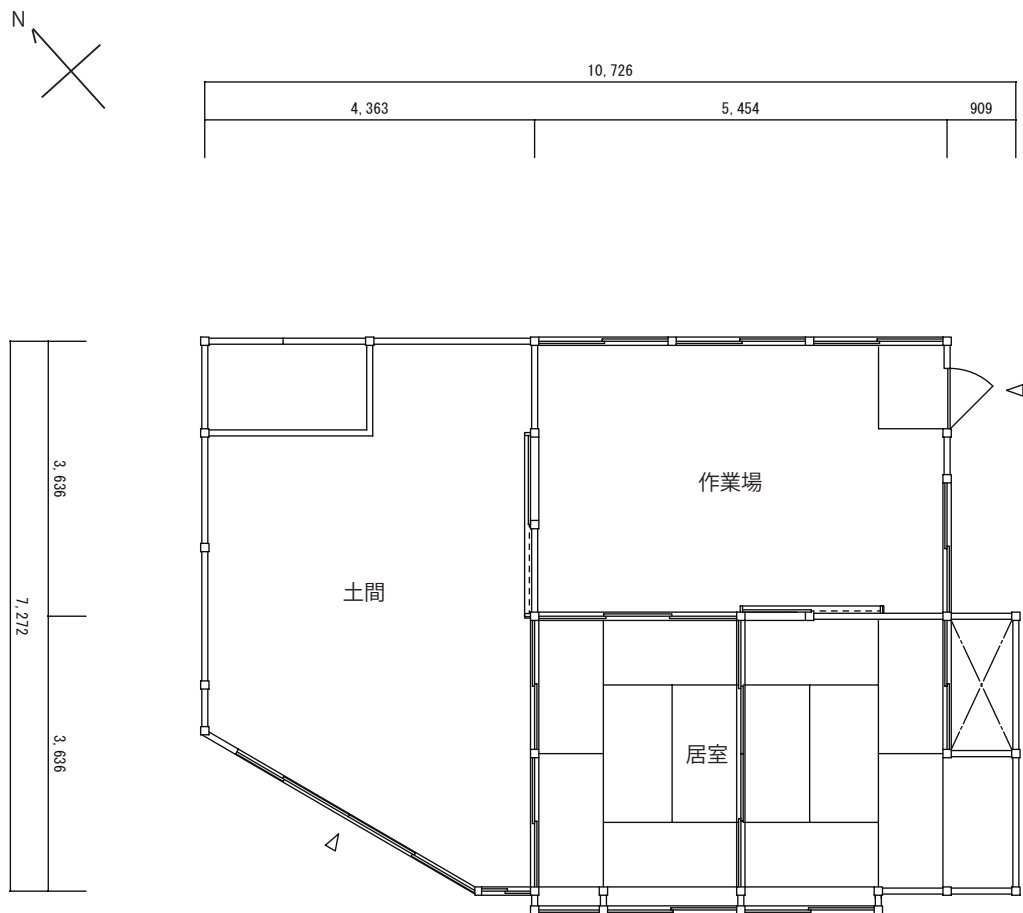
貸し家 北面



貸し家 東から見る庭からの出入口



コンクリート蔵は、貸し家（左）と赤い屋根の隠居（右）と並んでいた。



高島家住宅
貸し家 平面図
s=1/100

貸し家

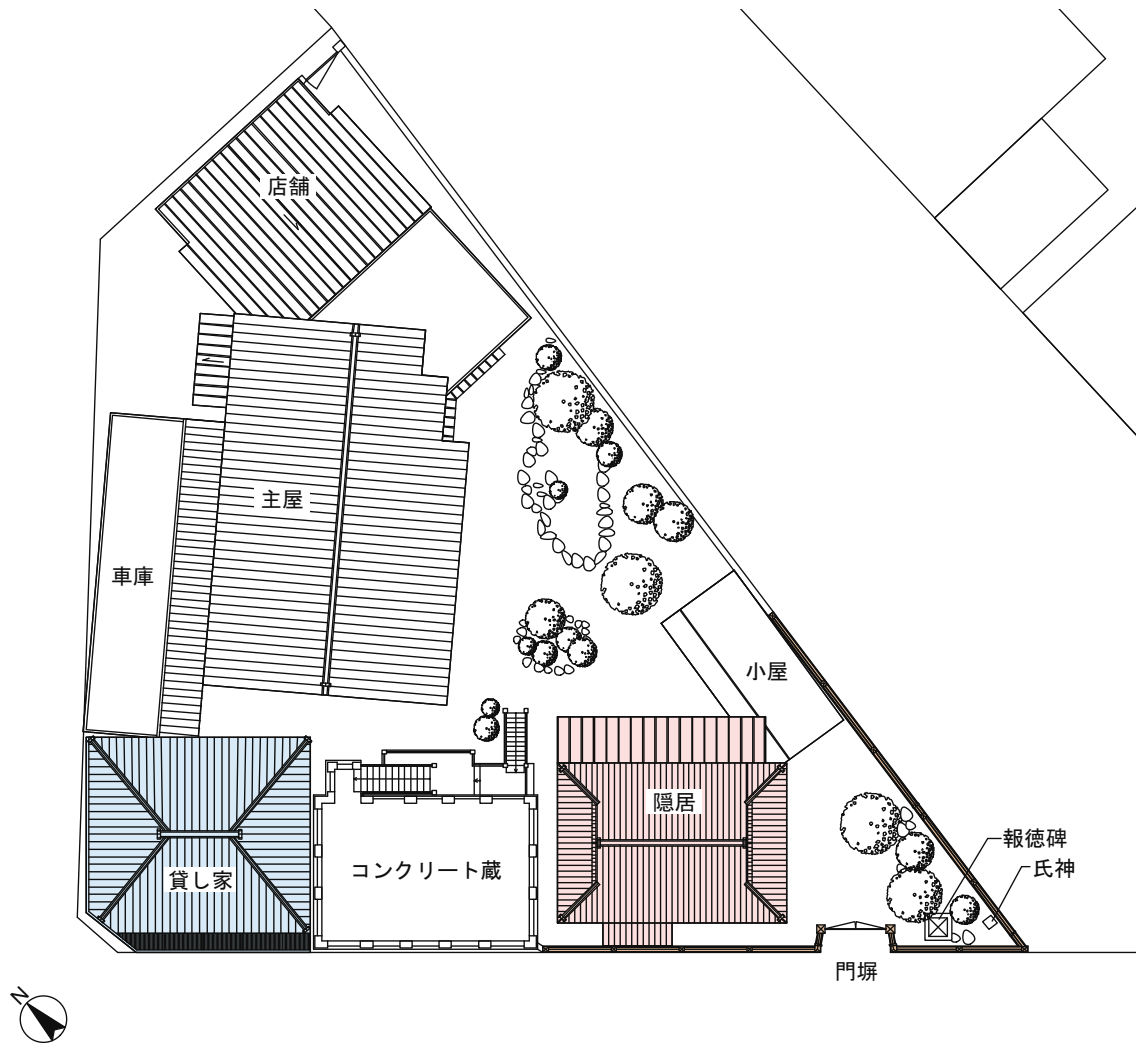
木造、平屋、寄せ棟造、棧瓦葺の建物である。建築年代を示す史料は発見されていないが、建具などの造作類より、コンクリート蔵や煉瓦造の門塀が作られた昭和初期頃の建築であろう。

角から入る空間はモルタル塗の土間となっていて、ここに代々の店子によって駄菓子屋などの店が開かれた。南側には畳敷きの6畳二間の続き間があり、床の間と押入が設けられている。

家業の紙工場がここに置かれたり、寮として下宿人がいたこともある。また、土間では機織りが行われたこともあり、作業場は表具師が使用するために板敷きにされた。小さな建物ながらも、住まいと多様な機能を兼ね備える。

庭への出入口のある西面以外では、窓が広くとられて壁面が少なかったことにより、2011年の地震に被災し、高さ方向1mに対して70ミリ、西に傾いていた。

2016年1月に隠居とともに取り壊された。



高島家住宅 敷地配置図
(隠居・貸し屋のあった時)
S=1/300



当初市街地を貫いていた小高川は、昭和初期に改修され、
上町の西側を通るようになった



川を渡り、西から上町に入ると、正面突きあたりに高島家の
貸し家が見える（写真ではブルーシートで覆われている）

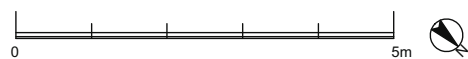
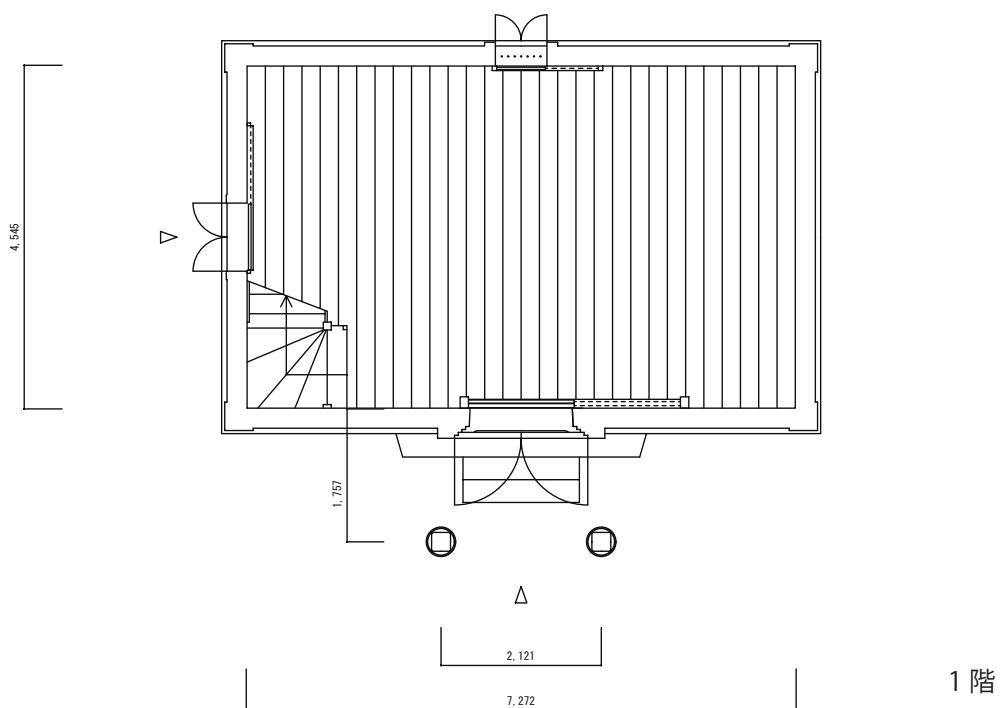
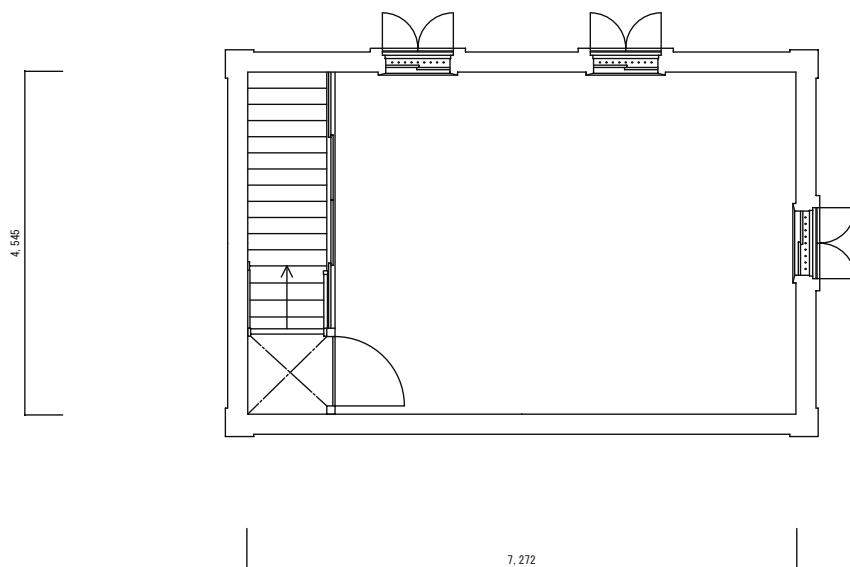


0 5m



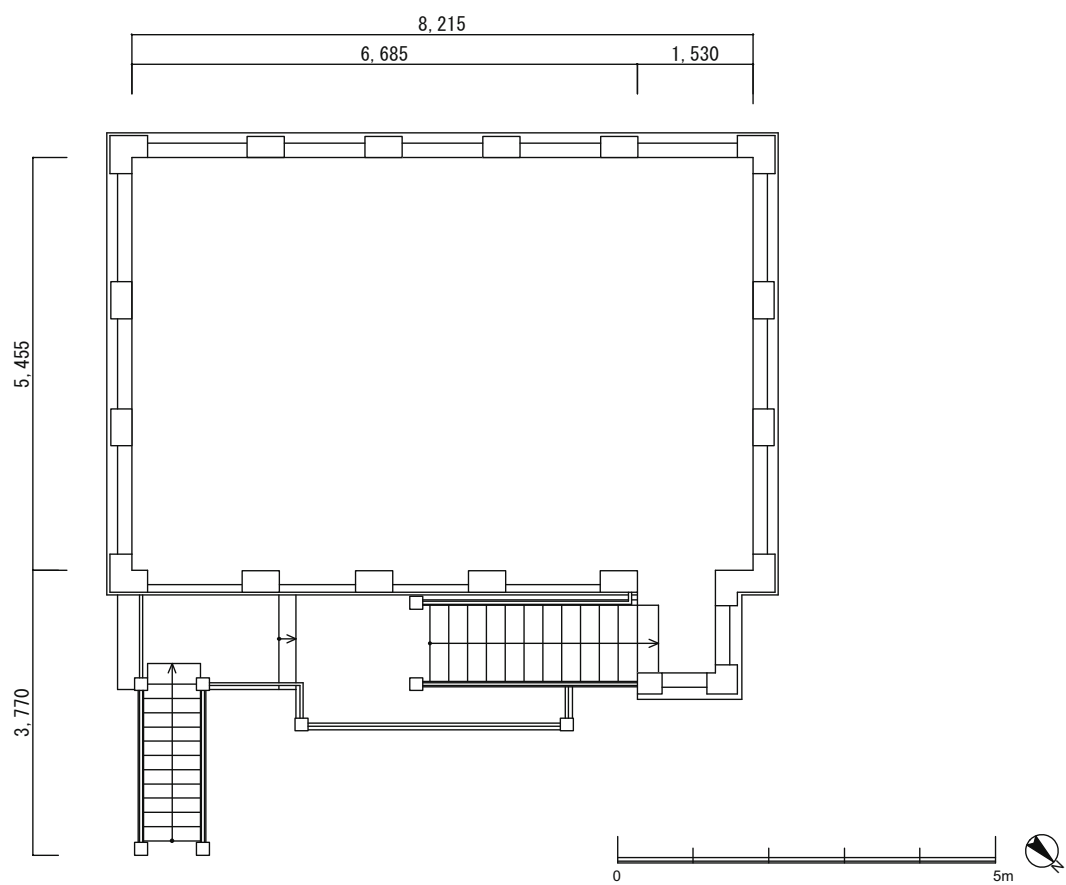
高島家住宅 敷地配置図 (現況)

S=1/300

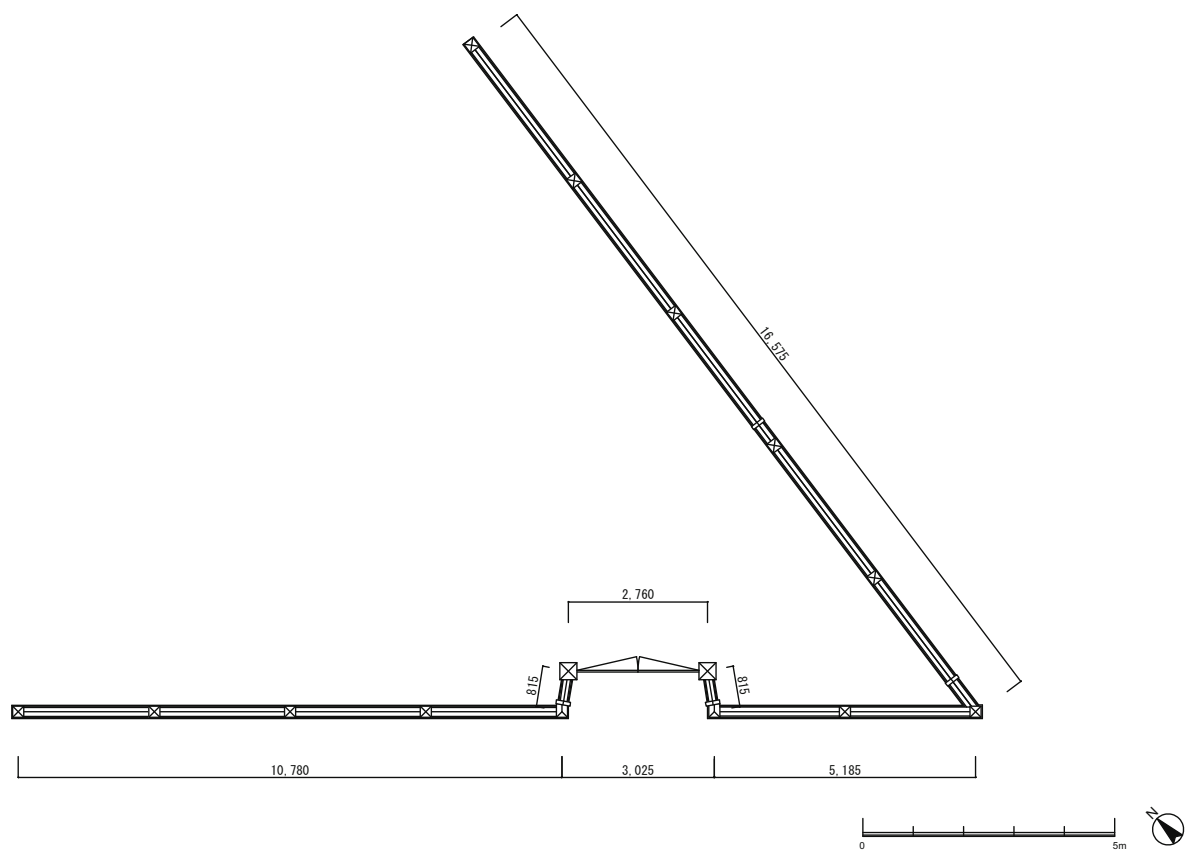


高島家住宅コンクリート蔵 平面図

S=1/100



屋上・2階テラス



高島家住宅門塀 平面図

S=1/150